

Title	附属図書館ラーニング・コモンズを利用した教育実践の試み
Author(s)	堀, 一成
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2011, 7, p. 81-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4593
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

附属図書館ラーニング・コモンズを利用した教育実践の試み

堀 一成

The Educational Attempts to Utilize Osaka University Library Learning Commons

Kazunari HORI

This paper reports the educational attempts carried out during the 2009 and 2010 academic years to utilize Osaka University Library's space called Learning Commons, which is a special area in the library where students can use both paper-based and digital archives and are allowed to have discussions. The subject for the first lecture held in the second semester of 2009 was introductory software development. The second lecture in the second semester of 2010 instructed students how to create a library pathfinder, which refers to a list of useful information on a specific topic. These lectures were held as regular courses with 15 lessons, which grant participants with two credits. The two extracurricular workshops were intended to teach academic writing. The first workshop series of three lessons took place in June, 2010, and taught first-year university students how to write a short academic essay. For the second workshop series, four lessons were held from December, 2010 to January, 2011, to teach how to write an academic paper, including a graduation thesis.

1 はじめに

大学生の望ましい学びのあり方が変化してきている。「TeachingからLearningへ」とはよく言われる言葉であるが、教員が何を教えるか、より、学生が何を学ぶか、が重視されるようになってきている。そのような変化に対応すべく教育実践の方法にも変更が加えられている。さらに、そのような新しい教育実践の場としての大学施設のあり方も、変わってきている。

近年、多くの大学図書館に、仲間と議論しながら学習を進める、新しい学びの場を設ける事例が多くなっている。そのようなスペースの命名はさまざまであるが、欧米の大学にならって、インフォメーション・コモンズあるいはラーニング・コモンズと呼ぶことが多い[1],[2]。

一般にラーニング・コモンズと呼ぶ施設は、図書館の中にあり、自由に使えるPC端末と、ディスカッションしやすい形状に工夫がある椅子や机、ホワイトボードなどを備えている。

活用法については、基本的に学生の自由に任せている施設がほとんどである。しかし、完全に放任すれば、ネッ

トカフェ的使用方に終始してしまう可能性もあり、教職員の側から利用法の啓蒙やイベントを開催するなど、積極的な働きかけも必要のようである。

本稿では、そのようなイベントの事例として、大阪大学総合図書館ラーニング・コモンズで開催した、セミナー形式授業や講習会の報告をする。他機関を含む、今後の図書館ラーニング・コモンズ活用法の参考になればと思う。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節では、大阪大学附属図書館のラーニング・コモンズについて簡単に紹介する。第3節では、ラーニング・コモンズを利用したセミナー授業（15回実施の単位を出す正規授業）の事例を紹介する。第4節では、正規授業でない自由参加の講習会として、レポートや論文の書き方に関する講習会を行ったので、その紹介をする。第5節はまとめである。

2 附属図書館ラーニング・コモンズについて

まず、施設としてのラーニング・コモンズについて紹介する。

大阪大学の場合、附属図書館の施設として、平成21年度中に2館にラーニング・commonsが開設された。その概要を表にまとめる。

表1 大阪大学附属図書館ラーニング・commonsの施設概要

	豊中総合図書館	吹田理工学図書館
開設時期	2009年6月	2009年4月
面積	756㎡	236㎡
据置PC	18台	29台
貸出PC	24台	9台
座席数	78席	40席

ラーニング・commons内には大小のホワイトボードが設置されており、自由なディスカッションや、貸出プロジェクターを使って投影プレゼンテーションなどを行うことが可能である。座席だけでなく、利用支援カウンターにTAや図書館職員が待機し、レポート作成相談や質問を受け付ける。また自分の得意とする分野の図書館利用法をTAが紹介するミニ講習会も行われている。蓋付きに限るが、飲み物は飲んでよい。ただし、食事は不可である。

附属図書館の通常閲覧席・サイレントゾーンは、一人で静かに学習することを想定し、仲間とのディスカッションを通じた学習はラーニング・commonsを利用するよう場所の使い分けを利用者に推奨している。

開設以来、年度全期間を通して利用率は高く、ほぼ常時満席の状態が続いている。特に試験期間近くは、希望するが席が無く利用できない者から苦情が出るような状況である。

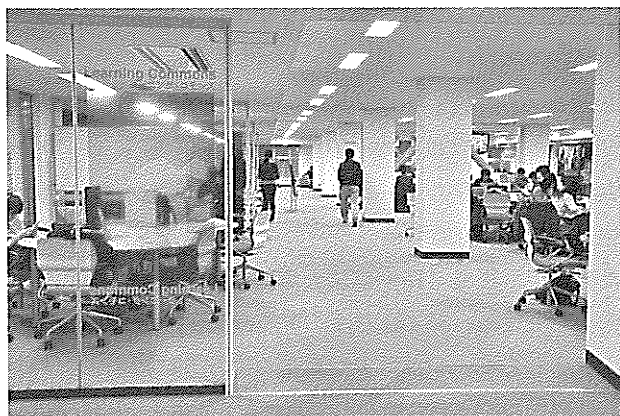


図1 利用中の総合図書館ラーニング・commons

3 正規授業（基礎セミナー）の紹介

この節では、ラーニング・commonsを利用した基礎セミナー授業について報告する。基礎セミナーとは、大阪大学共通教育科目の一種で、少人数・対話形式・体験的課題追求型のセミナーを行う科目である。主な対象を学部新入生とし、はやくから大学における学習の姿勢や研究についての意識を高めてもらうための科目である。

3.1 2009年度基礎セミナー

「システム開発ことはじめ」

自由利用以外の定期的なラーニング・commons活用の最初の試みとして、2009年度第二期（2009年10月から2010年3月）に「システム開発ことはじめ」と題する授業を行った。科目の内容は、ソフトウェア開発手法であるウォーターフォールモデルに沿い、受講生が考えたアイデアを、ステップを踏んでソフトウェアとして作り上げる体験をするものである。担当教員である本稿著者が教える形式でなく、受講生に必要なことは何か考えてもらい（ヒントは与えるが）自分でまとめて発表することを繰り返すことで、自発的な学びの姿勢を獲得してもらえるよう工夫したものである。

特に留意した点は以下のとおりである。

- ・ウォーターフォールモデルに沿って課題を細かい段階に分け、各回の負担を減らすとともに、ステップを踏んで開発する意識を高めるようにした。
- ・大阪大学オリジナルのポートフォリオシートを活用し、受講生が毎回の学習成果を自分で記録できるようにした。
- ・各プレゼンテーションの際、発表者以外の者にレスポンスシートを書かせ、直接相手に言いにくい意見も表明しやすいようにした。

受講者は、すべて学部1年生で、工学部所属が3名、理学部所属が1名であった。



図2 授業でのプレゼンテーション指導の様子

科目に対する受講者の詳細なアンケートを取ることはできなかったが、ポートフォリオシートの記入や、口頭での意見を参照すると、通常の教室と異なる衆人環視のラーニング・コモンズで授業をうけることは、緊張感があり、良いとの評価であった。また、当初の予想と異なり、他の人の注目度はそれほど大きくなく、すぐに慣れたとの意見もあった。

3.2 2010年度基礎セミナー

「図書館パスファインダーをつくってみよう」

定期的なラーニング・コモンズの第二の活用例として、2010年度第二期（2010年10月から2011年3月）に行っている、やはりセミナー形式の授業を紹介する。

このセミナーの話題は図書館パスファインダーを学生の手で造ろうとするものである。図書館パスファインダーとは、特定の分野やキーワードに沿った書誌情報やWebページ情報などをまとめ、利用者に便利のように整理し提供するものである。通常、この情報作成作業は図書館職員・教員・図書館補助TAが担当する。このセミナーでは、通常情報を受ける側の新入生が、自分の興味を同級生に教える感覚で、新入生独自の目線でパスファインダーを作成してみようとするのを試みる。この点は、著者の知る限り他大学での事例が無い、新しい試みである。

受講者は、文学部1名、外国語学部1名の2名の新入生である。両名とも、自分の興味のある分野を確定し、書誌情報、図書館映像資料情報、Webページ情報の収集を行い、提供できる形式にまとめている。ほとんどの回に、図書館職員にオブザーバーとして参加してもらい、図書館の提供する情報としてふさわしい内容や形式についてアドバイスをいただいている。

4 ライティング指導講習会の紹介

平成22年度において、ラーニング・コモンズにおける正規授業以外の試みとして、レポートや論文の書き方講習会を行った。本節ではその内容を紹介する。

4.1 「レポートの書き方講座」の紹介

2010年6月3日、6月10日、6月17日の3日を利用して、「レポートの書き方講座」を実施した。想定した対象者は学部1年生で、レポートの書き方に自信が無い者、レポートの課題を初めて経験し戸惑っているレベルの者である。参加者数はのべ47名（第1回 14名、第2回 16

名、第3回 17名；三回とも受講した学生は9名）であった。多くは1年生だが、3年生、大学院生の参加もあった。

第1回は「まずは形から入ろう」と題し、レポートとして基本的な形式を整えるためのWordの操作法（余白や文字数行数の設定・見出しの設定・図表の挿入方法）を紹介した。受講者には具体的にWordを操作し、ダミーの文章を使った仮レポートの作成作業も行ってもらった[3]。

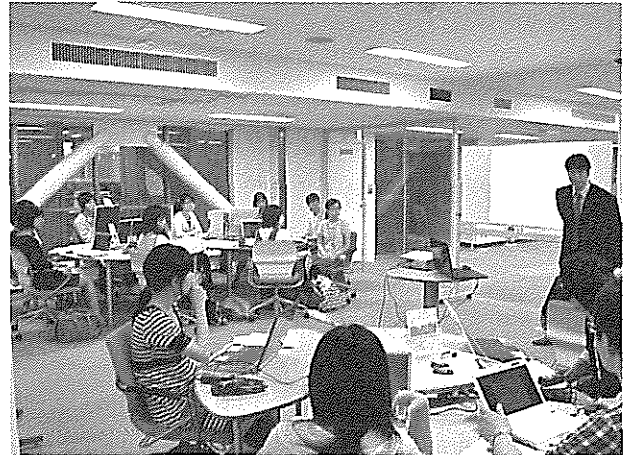


図3 レポートの書き方講座

第2回は「最低限のルールを守ろう」と題し、図書館の参考図書コーナーやネット情報をはじめとする資料の調べ方、引用の際の、情報倫理に基づく注意点を紹介した。受講者には参考図書コーナーで、実際に自分の学習分野に関連する参考図書を探してもらい実習を行った。

第3回は「よりよいレポートにするために」と題し、レポートを組み立てていく際の思考の整理法や、パラグラフについて、演繹と帰納の説明方法の違いなどを紹介した[4]。その後、1回目、2回目の内容も踏まえ、受講者に図書館利用法の提案に関するミニレポートを作ってもらい実習を行った。

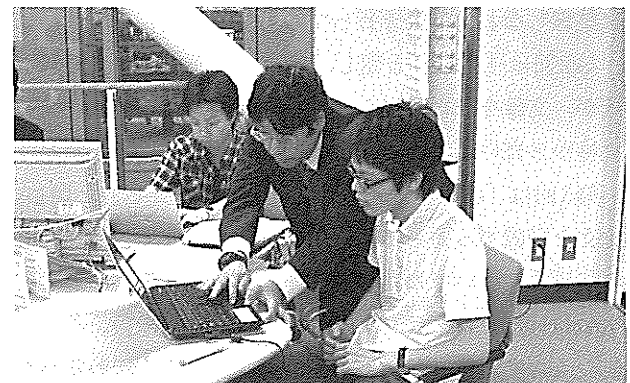


図4 ミニレポート作成実習での指導の様子

参加者には毎回記述式のアンケートに協力してもらった。講習への参加の動機として「そもそもレポートがどんなものかわからなかった」、「レポートの形式がわからなかった」との記述から、当初想定した未経験者の参加が得られたと考える。また、「表紙をつけたり、見出しをつけたり、などのやり方は初めて知ったので、とても有意義な時間を過ごせた」、「しらなかったWordの使い方を教えてもらえたのでよかった」、「引用のしかたなどわかって、ためになった」など、おおむね好評なコメントがもられた。

また「『論文の書き方講座』があれば良いと思う」「次は論文の内容についてみてもらえる講習会を希望する」、「エクセルの講習会があれば受けてみたい」「講習会でなく全15回の授業にすべき」など今後の拡大展開を希望する意見もあった。

4.2 「論文の書き方&文献の読み方

プチ・ゼミナール」の紹介

2010年12月7日、12月14日、12月21日、2011年1月11日の4日を利用し、「論文の書き方&文献の読み方プチ・ゼミナール」と題した講習会を行っている。

前項のレポート講座のアンケート結果に、(卒業論文など)論文を対象とするより高度な内容を望む声が多かったため計画されたものである。

この講習の対象者は、卒業論文の作成を控えた学部3年生、4年生を想定している。実際の参加者は学部1年生から大学院博士前期課程の学生まで広く分布し、合計6名であった。

第1回は「書く その1 論文とは?」と題し、卒業論文や学術雑誌論文で求められる論証中心の構成のありかたについて、学部授業の課題レポートや感想文との違いを手がかりに解説をおこなった [5]。参加者にはあらかじめ論文企画書を作成した上で参加してもらい、この回の後半では、企画書の内容を「問い」「主張」「論証」に整理しなおす作業を行ってもらった。

第2回は「読む」と題し、附属図書館職員の赤井規晃氏が、文献を読む際のテクニックについて紹介し、読む立場から書いた論文を見直してみることを指導した。

第3回は「書く その2 論文を組み立てる」と題し、論文を構成する要素であるパラグラフの考え方や、論証の記述法についての注意点を紹介した [6]。実際に受講生に数行のパラグラフを即興でつくってもらい、それを他の受講生がピアレビューし、情報がうまく伝わるパラグラフの書き方について実地に学んでもらった。

第4回は、以上の講習の結果をもとに企画書を練り直し、プレゼンテーションすることで完成させる作業を行った。

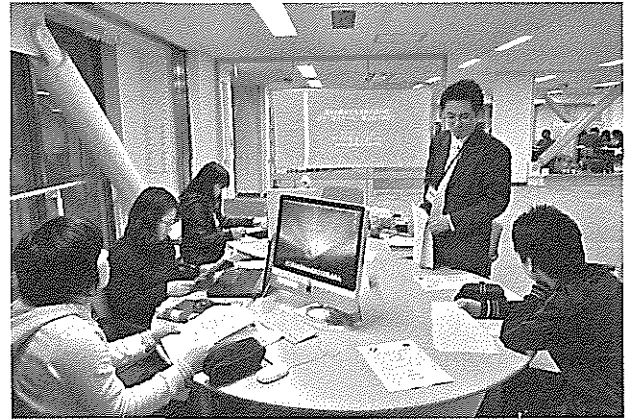


図5 図書館職員赤井氏の「読み」についての講習

5 おわりに

本稿では、大阪大学総合図書館のラーニング・コモンズを利用し、正規のセミナー授業や、自由参加の講習会を開催したことを報告した。現在も、全国の大学で図書館ラーニング・コモンズの設置が検討されているようである。担当図書館職員の共通の悩みは、場所の設置に終始するのではなく、いかに利用増加と学生の学びの姿勢獲得に結びつけていくかが難しいことにあるようである。本稿で紹介した事例が少しでも参考になれば幸いである。

謝辞

今回の授業や講習会の実施にあたり、大阪大学附属図書館利用支援課の方々に多大のご協力をいただいた。深く感謝するところである。上原恵美さん(現在は理工学図書館)、赤井規晃さんには図書館側の主担当者として、種々便宜を図っていただいた。特に感謝もうしあげる次第である。

参考文献

- [1] 山内 祐平、林 一雅、西森 年寿 他著 (2010) 『学びの空間が大学を変える』ポイックス
- [2] 松林 正巳 (2007) 『図書館はだれのものか』風媒社
- [3] 小笠原 喜康 (2009) 『新版 大学生のためのレポート・論文術』講談社
- [4] 木下 是雄 (1994) 『レポートの組み立て方』筑摩書房
- [5] 戸田山 和久 (2002) 『論文の教室』NHK出版
- [6] 木下 是雄 (1981) 『理科系の作文技術』中央公論新社